

医事・文談 九百六十九 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その257

子規周辺の人びと(七七)

少々あともどりをする。子規が明治12年12歳のとき、疑似コレラに罹り、安倍能成の父義任医師の診療を受け、全快したことへの礼状があることを書いた。

現存する子規の最初の書簡である。

日月勿々年己ニ暮レ明治十三年ノ春ヲ迎ヘ余偶感スル所アリ 謹テ愚簡ヲ草シテ安倍国手ニ呈ス 熟ラ客夏ヲ顧ミレバ某月某日病ニ羅ル乎実ニ困苦無極其病タル之ニ羅レバ生ル者ナク之ニ当レバ死セサル者ナシ 且ニ歩行スル者昏ニ黄泉ノ客トナリ夕ニ健壯ナル者朝ニ蓮台ノ族トナル 然ルニ余九死ニ一生ヲ免レ唯独リ世ニ存在スルヲ得ルハ実ニ国手ノ治術宜シキヲ得妙薬ノ法ニ適スルニヨルヘシ 其伝染スルモノヲ懼レズ暑烈シキモノヲ避ケス国手ノ厚情之ヲ謝セント欲スレトモ辞ナク之ヲ報セント欲スレトモ能ハス 余今十三年ノ元旦ニ逢フモ実ニ国手ノ賜ナリ 聊カ濁酒一樽ヲ呈シ謝辞ニ易フルノミ時厳寒ニ逢フ国手請フ自愛セヨ 明治十三年一月五日 常規 拝

安倍国手 机下

この書簡は、講談社版「子規全集」書簡一の巻頭に、また新潮社日本文学アルバム「正岡子規」にも写真版で載っている。

明治12年にはコレラが全国的に流行し、愛媛県下の患者一四、四一四人、死者九〇三人であった。

前年の夏コレラ(疑似コレラともいう)に罹り、九死に一生を得たことに対する礼の手紙であるが、薬札はもちろん払ったのであろうが、年が明けてから、あらためて酒一樽に添えた礼状である。酒を持参するようにしたのも、礼状を書くことをすすめたのも、後見人の大原恒徳だったのでは

なかるうか。

子規がいかに早熟でも、文に一字の訂正もなく、文意もよく通じるのは、大人の手がはいっているのではと考えられる。

文中には「今年元旦ニ逢フ」とあるが、書簡を發した日附は一月五日である。恐らく元旦に草稿を書き、それを誰かに見てもらって訂正されたものを、五日に清書したものと思われる。一字の書き損じもないところから推しても、加筆された草稿を見ながら、一字一句丁寧に書き写したものであろう。

酒を贈るといっても、子供の知恵ではなさそうである。

子規は明治13年、松山中学に入學した。

明治7年岩村高俊が佐賀県権令から愛媛県権令に転じ、松山に來任した。權令は、現今の知事にひとしい。自由民權の發祥地の土佐の出身であるから、民度を高めるために中学校、師範學校の設立に着手し、県學務課長にのちの俳人鳴雪となる内藤素行も登用した。

また慶應義塾出身で、福沢諭吉の自由教育を受けた草間時福を招いて中学の教育をまかせることとした。

子規の入學した松山中学は、こういう人々によって創立されたり、指導されていた學校であつた。しかし藩閥政府は、新しい思想を好まず、弾圧をつづけた。子規の入學した明治13年は既にその反動が始まつたころである。

中央からの干渉によつて、草間時福は12年7月に、契約満了の名目で松山を去らされ、岩村高俊は13年3月、内務省戸籍局長転出を命ぜられた。この時松山の自由民權論者の多くを連れて、内務省に移つた。内藤素行は二等属から四等属に格下げになつて文部省に移つた。

ひとたび点ぜられた自由民權の思想の火と、開拓使官有物拂下げ事件を契機とする明治23年を期し国会開設を約束する詔書を出さざるを得なくなつた政府の事情とは、松山中学の生徒を大いに刺激し、眼を政治や中央(東京)に向けさせることとなつた。藩閥政府と民權派との闘いは、大正初期まで続く。

表紙写真

前田森林公園

深川医師会 浦崎 政康

前田森林公園は、10年をかけて札幌市が造成した広い公園で、長いカナル(運河)とその両側に2列ずつポプラ並木が整然と植えられて

いる。人工的との意見もあるが、静かで落ち着いた美しい公園である。